僕の姉ちゃんがヤンデレなんだが、どうすればいい？

安里真裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の姉ちゃんがヤンデレなんだが、どうすればいい？

【Ｎコード】
Ｎ５９５９Ｕ

【作者名】
安里真裕

【あらすじ】
平凡な僕とヤンデレな姉ちゃん。僕を愛してはくれないけれど、それでも僕はかまわない。概して姉弟とはそういうものだ。ドラマチックとは程遠い、ホームコメディの一つの形。

前編 ― 僕と姉ちゃんと麻のロープ（前書き）

※１：この小説は不定期連載です。
※２：作中に出てくる描写は、実際に行うと命を脅かす可能性があるので、絶対に真似しないでください。

前編 ― 僕と姉ちゃんと麻のロープ

学校から帰ると、ロープを持った姉ちゃんが家の中をうろついていた。

「あ、ゆーくんお帰りー」

「……何持ってんの」

姉ちゃんは、玄関口に立つ俺と、左手に持ったやけにしっかりした麻のロープの間で、何度も視線を往復させる。

「縄だよ？」

「知ってるよ！　つーか見たらわかるよ！　反語だよ反語！　質問してるんじゃないの！」

数秒首をかしげた姉ちゃんは、何かを思い出したらしく、再び満面の笑みを浮かべた。

「あー！　知ってる知ってる！　それ、国語だよね。ごめんねゆーくん、お姉ちゃん最後に国語習ったの十年前だから」

「いや、あんたまだ二十二だろ！」

「でもゆーくん、わたし中学からは国語勉強してないよ？」

「それはあんたの個人的事情だろうが！」

「うーん……そうかも」

頭痛がするとかそんなんじゃなくて、思わず天を仰ぎたくなる。

「オゥジーザス」の声を漏らしたくなる。

こういうのは、ずっと一緒に暮らしていれば慣れるというものでもなく、むしろ姉ちゃんの言動・行動のあまりの突拍子の無さに、身近に潜む天文学的数字の存在に気付かされるというものだ。世界一位に返り咲いたメイドインジャパンのスーパーコンピューターでも、この姉ちゃんの行動パターンを計算しきることはできまい。

「ところでゆーくん」

「ん？」

ニコニコ顔をこちらに向けてくる姉ちゃん。僕は試しに姉ちゃんの次の言葉を推測してみる。人間の脳味噌の記憶容量はなんたらテラバイトだとか言うが、ＣＰＵはいったいどれくらいあるのだろう。

「この家に、高さ二メートル以上で、五十キロくらいの負荷に耐えられて、床と平行になってる足場とか壁のでっぱりって無いかな？」

せいぜいセレロンＭの僕が、スパコンを超える姉ちゃんにかなうはずがなかった。

「知るかよ！　てかそのロケーションがありえたとして、その左手に持ったロープで何するつもりだよ！」

「なにって、くび」

「あー！　あー！　ひっかかったー！　今のも反語ですー！　テストだったらペケついてますー！」

「ううー！　ゆーくんひどーい！　お姉ちゃんのこと騙したー！」

拗ねるような仕草をする姉ちゃん。マンガではよくあるリアクションだが、姉ちゃんがそれをやると、僕には本気か冗談か判断がつかないので困る。

「はいはい。じゃ、そろそろその物騒なものをこちらに渡しなさい」

「ええー、やだよー」

ロープをかばうように抱きしめる姉ちゃん。当然ロープには抱きしめられるような厚みは無いので、ただ胸の間で垂らしているようにしか見えない。

「それじゃ、これと交換だ」

僕が手に持っていたビニール袋を姉ちゃんの前に差し出すと、姉ちゃんはおそるおそるその中を覗き込んだ。胸の間のロープが足下でたゆむ。

「わ……お肉だ！」

袋の中身は、僕が学校帰りに肉屋で買ってきた、格安の某県産の牛肉のトレーパックだ。

姉ちゃんに満面の笑みでその袋をぶんどられたので、僕は床に落ちたロープを回収し、そのまま玄関のげた箱の奥に突っ込んだ。こ

こなら姉ちゃんには気付かれまい。
「ねえねえ、なんでゆーくんお姉ちゃんがそろそろお肉食べたい季節だなーって思ってたのわかったの？　ゆーくんエスパー？　それとも読心術？　読唇術？　もしかしてストーカー？」
満面の笑みの姉ちゃんが胸にビニール袋を抱えてにじり寄ってくる。歩み寄るスピードはゆっくりでも、口を動かすスピードはまさに怒濤。ツッコミが追いつかない。免許皆伝でも唇など読めるわけがない。
ひとまず、にじり寄りすぎて玄関に落ちそうになっている姉ちゃんを、両手でズイと押して受け止めることにした。腹に肉は感じるものの、体重はなるほどたしかに五十キロを下回っているようだった。
「もうわかったから、姉ちゃんは先に焼き肉の準備しててよ」
「はーい！　お姉ちゃんお腹ペコペコだから、すぐ来てねー！　ゆーくんの分残してあげないかもよー」
そう捨て台詞のようなものを吐くやいなや、姉ちゃんはおたおたとした足取りで階段を上っていった。
「換気はちゃんとしろよー！」
「はぁいー！」
返事の語尾に「おっと」ととという声とズダダンという効果音を添付し、姉ちゃんは自室へと消えていった。
「なんでって……」
「――あんたが昨日通販で練炭買ったからだろうが……」
僕の姉ちゃんは病んデレだ。

後編 ― 僕と姉ちゃんと練炭パーティ

一昔前、マンガやアニメなんかで「ヤンデレ」とかいう属性が流行った。

ツンデレのもじりで、主に主人公のことが好きで好きでたまらなくて、その愛情が病的なまで域に達しているヒロインのことを指すらしい。

僕の姉ちゃんがヤンデレと言ったが、そういうヤンデレとはまた違ってくると思う。僕と姉ちゃんはれっきとした血の繋がりのある姉弟だし、間違いを起こしたりするような間柄でもない。

むしろ姉ちゃんは僕のことを単なる同居人としてしか見ていないだろうし、僕も姉ちゃんのことは手間のかかる要介護老人くらいにしか思っていない。概して姉弟とはそういうものだ。

コップ二つに箸二膳と小皿二枚、ウーロン茶の二リットルペットを持って階段を上り、無理矢理空けた右手で姉の部屋のドアをノックする。

ノックをしなければいけないという時点で、まずおかしい。

「はぁいー。どうぞー」

そのまま引き戸を開けようとするも、左脇に抱えたペットボトルが、服と擦れてずり落ちそうになる。

「『はーい』じゃなくて、できればドアを開けてほしいんだけど……！」

「んー」

一呼吸置いて、ドアが開く。

姉ちゃんは、なぜかコップを右脇に抱えていた。

「おまたせー」

「……置けよ」

シングルコアの僕にできるツッコミは、せいぜいその程度だった。

部屋の中央には七輪が置かれていて、その網の上では丸々としたタマネギがアンバランスに焦げ目をつけられていた。

その隣で炭と化しているのは、もしやしいたけではなかろうか。判断基準は、柄(え)だ。

「それにしてもゆーくん、よくお姉ちゃんが焼き肉の準備してるってわかったよね。さすがストーカーだね」

無視してコップにウーロン茶を注ぐ。と、泳がせた視線の先に、壁に掛けられた見慣れない鉛筆画を見つける。不可解な抽象画のようなものだ。

「姉ちゃん、また絵描いたのか。今通ってるの、外国語の専門学校だろ」

「うん。でも、お姉ちゃん絵描くの好きだし、やめないよ」

箸で転がしながら、たまねぎの焼き加減を見る姉ちゃん。そいつが広くスペースを占有しているため、肉がほとんど置けない上に、さらに転がしなんてするものだから、僕の箸が生肉をつかんだまま網の上空を遊覧飛行するはめになっている。

「――じゃあ、なんで美専やめたんだよ」

途端に姉ちゃんの箸が止まった。

その隙にたまねぎの自由を奪うように生肉を可能な限り設置したが、それでも姉ちゃんは箸を止め黙ったままだ。

「……姉ちゃん？」

肉の焼ける音の向こうから、すぅ、と息を吸う音が聞こえ、ふぅ、と息を吐く音が聞こえた。

続いて僕の息を飲む音がして、姉ちゃんのすぅという音。

すぅ、すぅ。すぅ、すぅ。

「箸網に乗せたまま寝るな！」

「ひゃうっ！」
飛び起きた拍子に、たまねぎがカーテンの近くまでぶっ飛んでいった。
「ごめんね。お姉ちゃんさっき薬飲んだばっかりだから」
薬、とだけ言われても困る。姉ちゃんの所有する薬の数は、姉ちゃんの本棚の本の数よりも多い。
「薬って、何飲んだんだよ」
「ハルシオン」
「めっちゃ寝る気じゃねーか！」
「えへへ」
「『えへへ』じゃねー！　寝そうになったら起こしてやるから、眠気来る前にさっさと食っちまえ！」
「うん、そうするねー」
ひょい、ぱく。ひょい、ぱく。姉ちゃんは僕が育てた総勢十四匹の可愛いお肉たちを一口で平らげていき、ドナドナ子牛たちがいなくなると、新たな生け贄を求めて僕を見つめた。
仕方なく姉ちゃんの糧となるべきバラ肉たちを網の上に並べていく。
たまねぎのいなくなった網の上が寂しく思えて、不覚にも半焦げのたまねぎに国民的青ダヌキを重ね見る。途中、スッポンのアレのような黒い物体が網にこびりついているのを発見したので、南無と唱えて小皿によけた。

「姉ちゃんさ、一番最初はアニメーションの専門学校行ってたじゃん。あれもまだ諦めてないの？」
ひょい、ぱく。スッポンの息子。
「んーん。アニメーターはいいよー。あれってお給料安いんだって」
ひょい、ぱく。美味い。
「……今の収入ゼロよりましだと思うけど。ていうか飯食ってるからマイナスだし」

ひょい、ひょい、ひょい、ひょい、ひょい、ひょい……
「だって、前にお姉ちゃんがバイト始めたいって言ったら、ゆーくん怒ったでしょー？」
「あれは持ってきた話が風俗のバイトだったからだろ！」
ぱく。ぱく。ぱく。ぱく。ぱく。
「だってー、楽だし？」
「そういう問題じゃないだろ！　そんなこと言ってるけど、あんた処女じゃないのかよ！」
「えー？　どうだったかなー？」
「僕が知るかよ！　てか今の反語だよ！　つーかそれくらい覚えとけよ！」
ツッコミを入れながら姉ちゃんのための肉を補充しなければならない自分の身分が悲しい。
「……すぅ」
「寝るなーっ！！」

三つ買ったトレーを空にし、転がったたまねぎを回収し、練炭についた火も消し、ようやく僕と姉ちゃんの焼き肉タイムは終了となった。
「じゃあ、お姉ちゃんもう寝るね」
そういうわけにはいかない。
「寝付くまで見ててやる」
「えーっ！　だめだよ。恥ずかしいもん」
「変なことされるよりましだ」
たとえば、ベッドのすぐ横に集結してるカビキラーと洗剤の仲間たちなんかを使って。
「変なことって、もしかしてエッチなこと？」
「違うわ！」
胃に収まったウーロン茶が逆流する前に、昨夜のおかずと今夜の姉が混濁したイメージが脳を駆け巡る前に、なんとかツッコミを返

す。
「じゃあ何のこと？　お姉ちゃんばかだからわかんないなー。ねーえ。これ反語じゃないよー。答えてよー」
姉ちゃんが自分を馬鹿と称する時は、決まって本心ではそう思っていない時だ。反語という言葉を持ち出してきたのも、ちょっとでも頭を良くみせようとしたからに違いない。
「ねーえー」
実際、姉ちゃんは馬鹿じゃない。僕みたいな凡人がひしめく域を軽々超越している類いの人間だ。
「こーたーえーてー」
僕のいない所での姉ちゃんを、
「ゆーくーん？」
僕は知らない。
「ゆーくん！」
「あー！　うっさいなもう！」
思わず、右手の近くにあったクッションをぶん投げた。

猫のキャラクターを象ったクッションは焼き肉の臭いの漂う室内をほんの三十センチ滞空し、姉ちゃんの小さな顔を覆い尽くすようにクリーンヒットした。

「ね、姉ちゃん！　ごめん、大丈夫？」
返事は無い。サンリオの白猫は部屋の隅へ吹っ飛んでいったが、姉ちゃんは依然そのまま、座ったままの姿勢で、目を瞑ったまま動かない。しゃべらない。白い顔が、わずかに赤くなっている。
僕も、それほど馬鹿ではない。
「……おやすみ」
そういえば、姉ちゃんは睡眠薬（ハルシオン）を飲んだと言っていた。きっとこのまま朝まで目を覚まさないだろう。
起こさないように、慎重に姉ちゃんをベッドに運んでやる。

寝ている状態ですらこんなにも軽いのだから、本当は五十キロどころじゃないのだろう。
窓とカーテンを閉め、風呂場から持ち出したであろう洗剤を回収し、ひとまず電気を消して姉ちゃんの部屋を出る。
食器や七輪の片付け、練炭の処理、芳香剤の設置……僕の仕事は、とても一往復の間に片付くような数ではない。
なんでそこまでするのかと聞かれたら、姉ちゃんが「憎めない」からとしか言いようがない。

僕の姉ちゃんは病んデレだ。
手間がかかる。病院へも僕が付き添う。
目を離せない。いつ何時なにをやらかすか、知れたものじゃない。
僕が学校に行っている間に薬が切れて目を覚ましたらと思うと、気が気じゃない。
それでも、姉ちゃんは「憎めない」し、そして何より、姉ちゃんの「デレ」は僕の生き甲斐になりつつある。

僕は、どうすればいいんだろう。

後編 ― 僕と姉ちゃんと練炭パーティ（後書き）

連載はまだ続きます。
ご意見・ご感想など、ご気軽にお寄せください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5959u/

僕の姉ちゃんがヤンデレなんだが、どうすればいい？

2011年7月4日22時25分発行